

# シャイロックと「貪欲」

—— 英国道徳劇における「貪欲」の通時的考察 ——

横 尾 元 意

## I *The Merchant of Venice* と *Il Pecorone*

シェイクスピアの *The Merchant of Venice* (1596-8) の主要な材源は『イル・ペコロ<sup>(1)</sup>ーネ』という1558年刊行の中世イタリア物語集であると考えられている。その物語のひとつが「指輪の紛失」と「人肉裁判」の挿話を含みシェイクスピアの劇と酷似した筋立てになっているからである。シェイクスピアが原語でこの物語集を読んだのか、また、原『ベニスの商人』と言われるものが存在したかどうかという問題はあるものの、彼はこの一挿話に数々の手直しを加えて *The Merchant of Venice* を創作したのである。そのうちで見逃すことの出来ないのが次の点である。『イル・ペコローネ』は主人公ジャンネットーがいかなる経緯でベルモントの美しい貴婦人を勝ち得るかが物語の主筋なのに、シェイクスピアの劇はバサーニオの愛の成就よりも、ユダヤ人シャイロックから借り入れられた金がどのようにして返済されるかということが筋立ての中心になっていることである。これはジャンネットーが名付け親で養父のアンサルドーから貿易よりも世界を見聞するという目的で立派な船を仕立ててもらってベニスを出帆するのとは違って、バサーニオのために親友のアントニオが危険な契約で金を工面することからシェイクスピアの劇は展開していくという冒頭の相違に早くも表われている。また、シェイクスピアは『イル・ペコローネ』にはない「箱えらび」を導入し

ている。1577年初版で1597年改訂されたイタリアの物語集『ジェスタ・ロマノーラム』がその材源と言われている。『イル・ペコローネ』で貴婦人の夜伽の相手をする事になっている部分が *The Merchant of Venice* では『ジェスタ・ロマノーラム』で王妃選定の手段に用いられる「箱えらび」に替っているのである。さらに、シェイクスピアがシャイロックの役作りの参考にしたと指摘されている C. マーローの『マルタ島のユダヤ人』と比較してみると、バラバスは野心に満ちた人生の盛りにある人物であるかのように表現されているのにシャイロックは執拗な金銭欲に取り憑かれた老人なのである。それゆえ、自分を侮辱し商売の邪魔をするキリスト教徒のアントニオを憎むわけである。

シェイクスピアは何故、『イル・ペコローネ』から「夜伽」の部分を削除してより高尚な素材を採用し、また、Romantic Comedy となるはずの物語を強欲な高利貸しの老ユダヤ人シャイロックを中心的登場人物とする Tragic Comedy とでも評すべき劇を創作したのであろうか。

さて、*The Merchant of Venice* はこれまでも道德劇の伝統の中で解釈され、また金貸しのシャイロックを道德劇の Covetousness の流れを汲むものとして考えるのは新しいことではないのである。<sup>(2)</sup>そこで、「食欲」に焦点をしぼり、英国道德劇と経済社会思想に通時的考察を加えることによって、これまでの研究に検証を与えるとともに、前述の問題に解答を試みようとするのが、この論考の目的である。

## Ⅱ 「食欲」と英国道德劇の伝統

この「食欲」という問題は、一連の英国道德劇の中でも重要なテーマとなったのである。

ほとんど完全な形で現存する最古の英国道德劇 *The Castle of Perseverance* (1400-25)<sup>(3)</sup> では「食欲」は罪の根源と言われ、そのように表現されている。「食欲」は自分の王である「現世」の金庫係で、彼

にかわって国々を所有しているばかりでなく、幼児の時分より「現世」に忠実なのである。そして「現世」より「人間」を託され、彼に世の知恵を教え込むのを任されるのである。従って、現世の幸福とは「人間」にとって貪欲な行為なのであり、それによって彼は現世の悲しみを生むことになる。結局、この劇において、「貪欲」は「現世」の代行者であるばかりでなく、「現世」の本質的属性として表現されているのである。また、「貪欲」が「人間」の魂を汚そうと、その他の六大罪源に呼びかけると、彼等は彼の下に急ぎ集まって来る。というのも、「貪欲」は他の大罪源によって愛されており、「高慢」「嫉妬」「憎悪」を養っているからである。それで「人間」は貪欲になると、他の六大罪の性質をも帯びることになるのである。さらに、「貪欲」は、他の大罪源とは違って、「人間」を守る「寛大」を差し置いて、直接「人間」を説得して彼に堅忍の城を捨てさせる程の力を具えている。そして、結局、この「貪欲」の罪の為に「人間の魂」は「悪天使」によって地獄へと連れ去られ、神の「慈悲」がなければ、滅びることになったのである。従って、「人間の魂」が救われるためには、「貪欲」を避けて「善天使」に従わなければならないのである。この劇では現世蔑視とは貪欲を蔑視することなのである。

*Everyman* (1480-1500)<sup>(4)</sup> には「財産」(Goods) という名称の人物が登場する。この「財産」を専ら愛することは永遠の愛に背き、人間にとって身の破滅の原因となるのである。というのは、「財産」は人間に羽振りのよい生活をさせながら、その魂を腐らせる性質を持っており、言わば、人間の魂を掠める盗っ人なのである。人間は「財産」を程々に愛し、その一部を貧しい人々に分け与えて善行を施しておけば、「死」から人生の決算書を神へ差し出す旅に出るよう命令された時、その準備が出来ていたはずなのである。この *Everyman* も物欲への節度つまり貪欲に注意を喚起しているのである。

*Mundus et Infans* (1500-20)<sup>(5)</sup> では、力と富の王 Mundus (「世界」)

自身が自分に従う Infans (「子供」) に必要な衣食を提供し、すべての富を与えている。そして、Covetousness の位置は Mundus を助ける 7 人の主つまり七大罪の一構成員に過ぎなくなっている。さらに七大罪は Folye という登場人物に集約されてしまっているのである。しかしながら、この劇においても、covetousness が問題となるのである。というのは、covetousness が貪欲だけでなく、“意欲” という意味にも解釈され、そこに Covetousness 理解の新しい局面が開示されているのである。

*Three Laws* (1530-36)<sup>(6)</sup> になると、Avaritia は自らを Covetise と名乗り、Deus Pater は彼を Covetousness と呼び、Vindicta Dei と Infidelitas は Avarice と言って、呼称に不統一が見られるようになる。しかも、Avaritia は自らが貪欲で、金儲けのためには新しい信条をも作りかねない人物である。しかも、Ambitio と並び称され、愚かな人間達の良心に影響を与えて、彼等に偶像礼拝はじめ総ての悪行をさせる罪の根元として表現されている。この Avaritia は高級聖職者達の聖職売買を明らかにするのに登場する寓意的人物なのである。ところが、ジョン王とイノセント三世との史実に基づく *King Johan* (1530-36)<sup>(7)</sup> に出てくる Private Wealth は Pandulphas という実在の人物を念頭に置いているのである。従って、一段とその寓意性を失ってはいるものの、依然として、劇進行の上で中心的登場人物なのである。また、劇は一貫して、神の言葉を伝えるという本来の任務を蔑ろにしている法王を頂点とする僧侶階級の迷信的宗教儀式と脅迫とによって、特に「イングランド」と「ジョン王」に見せた執拗な貪欲を重要な問題として取り上げているのである。

*Respublica* (1553)<sup>(8)</sup> の Avarice も、他の Vices の創始者であるとともに指導者であり、背中に多くの財布を下げて、自ら貪欲を実践する人物である。彼は Policy と名乗って、富の傾むいた Respublica に近づいて、その救済を約束し、さらに、仲間を招き入れて People から収

奪を始めるのである。従って、*Respublica* は、一時、*People* の窮状の訴えに、その犯人が分らなかったのだが、やがて *Verity* から *Avarice* 達の正体を知らされるのである。そして、*Respublica* より罷免された *Avarice* は *Verity* から懐と服の内側に隠し持っていた金袋を追求されると *Respublica* のところへこっそり持って行こうとしていたのだと批難をかわそうとするのである。しかし、*Avarice* は *Nemesis* の断固とした態度によって糾弾され、金袋を取り上げられるだけでなく不正に *People* より取り立てた金は一ファージングまで返還させられることになり、官憲に引き渡されるのである。このように、*Avarice* の行動を辿ってみると、この劇の梗概になってしまうことから、「貪欲」が *Respublica* においても、劇進行上、中心的な登場人物であるとともに中心的テーマであることが理解されるのである。そして、国家の行政府に巢食う「貪欲」が諸悪の根源であるとともに原因であり、国家の秩序を回復するためには、その根本的な排除が必要であることをこの劇は提唱しているのである。

*The Conflict of Conscience* <sup>(9)</sup> (1581) においても、*Avarice* は僧侶階級を支配して利得にかきたて、それを隠すために *Hypocrisy* を支持させ、また彼等と協働して平信徒を思いのままに操り、信徒達が従わないと *Tyranny* を使って嚇して味方につけるというやり方をしている。*Avarice* は *Tyranny* とともに *Hypocrisy* の方法で人々を悲しみの道へ走らせるのである。そのように、主人公フィロロガスもローマ・カトリックへの改宗を迫られ、虚栄の鏡を見せられると、富を拒絶して神と天に住むよりも、愛すべき神を捨てて富とともに地獄へ投げ落されるのを選ぶのである。そして、やがて、フィロロガスは自分を神の選びの中に入っていない呪われた人と決め込んで、絶望に陥っていくのである。この *The Conflict of Conscience* においても、富への貪欲が墮落の主要な原因であり契機として取り扱われているのである。

このように、一連の英国道徳劇は貪欲をテーマとしたのである。その経緯の中で、「貪欲」は Covetousness から Avarice と名称を変えただけでなく、*The Castle of Perseverance* の Covetousness のように「人間」を貪欲の罪に誘って魂の滅びをもたらす働きを持つ登場人物が、*Three Laws* では自ら貪欲な行為をする人物へと変化し、*King Johan* になると Private Wealth という人物は Pandulphas という実在した人物名に替って、益々、貪欲の能動的行為者としての人間に近似してくるのである。そして、*Respublica* においては、*The Castle of Perseverance* の天の会議で、神の四姉妹が貪欲の罪で地獄に連れて行かれそうになっている「人間の魂」の位置に4人の Vices がついて Nemesis の裁きを受けているのである。しかも、その場所は天ではなくイングランドなのである。このように「貪欲」と貪欲な人間の融合という趨勢の中で、英国道徳劇の伝統を踏え“貪欲”をテーマとして *The Merchant of Venice* が創作されたと考えられるのである。そのように考え得るとするならば、シェイクスピアが『イル・ペコロネ』の夜伽の部分削除した理由の一つも理解出来るのである。もし、素材のままに夜伽の方法でバサーニオとポーシャの愛を成就させるとしたら、ジャンネットーとベルモントの貴婦人の場合のように少なくとも3回の夜伽が必要となってくる。そうしたら、貪欲よりも二回の失敗にもめげず愛を成就させた努力に力点に移り、また、ジャンネットーのようにバサーニオがアントニオに三回も金の工面をさせたとしたら、道楽の誘いを受けかねないのである。従って、シェイクスピアは、それらを避けるために、より高尚な「箱えらび」を導入して、3回の夜伽によってあげていた効果を凌ぐ深みを劇に附与するのに成功しているのである。つまり、Romantic Comedy となるはずの素材を道徳劇の伝統に従って脚色しようとしたために Tragic Comedy とでも言うべき *The Merchant of Venice* が創造されたと解釈出来るのである。

### Ⅲ 「貪欲」とチューダー前期の経済社会思想

ところで、「貪欲」の問題は特に羊毛の対外輸出と農地の囲い込みとの関わりで、チューダー王朝時代にも社会的問題として論評され続けたのである。<sup>(10)</sup>

Thomas Cromwell の失脚にともなって1540年に押収された書類の中に Clement Armstrong <sup>(11)</sup> (1477-1536) の経済問題を取り扱った論稿がある。彼はスティープラーズの増加が羊毛の価格の騰貴を招き、そのため富裕農民とジェントルマンは農地を囲い込み、その結果、庶民の失職と困窮をもたらしたと論じている。また羊毛は神によりイギリスの福祉のために特別に賦与された財貨であると考えアームストロングは自己の利益の為に国全体の福祉を顧みない商人達の利己的動機の為に、それが国を富ます貴金属ではなく外国商品と交換されるという事実を黙認出来なかったのである。それゆえ商人層を strange members と呼んでいる。アームストロングにはイギリス商人層が国民経済の正常な運行を阻害し、国王と貴族と庶民の福祉を侵害しているとみえたのである。特に16世紀に入ってからスティープラーズの勢威はアドベンチャラーズに移り、ロンドン商人が貧しい階級の子弟を徒弟にするようになると、年期のあけた新米の商人は毛織物を掛で仕入れて海外で販売し、その代金で外国商品を購入することになる。するとイギリス毛織物の輸出価格が低落し、従って、古参の商人は為替業務へ転向してしまい、一層イギリスの輸入が増大することになったとアームストロングは主張して、イギリスに毛織物スティープルの設置を提案するのである。しかしながら、1530年代は折しも宗教改革の時代であり、Henry VIII と Thomas Cromwell が利用したのも富裕な農民、囲い込み業者、牧畜業者、買い占め業者とともに下院に巢食う商人層だったのである。

Thomas Starkey <sup>(12)</sup> (1490c.-1538) は人文主義の立場から枢機官ポ

ウルとエラスムスの高弟でオックスフォードの修辞学講師トーマス・ラプスィットの対話形式で *A Dialogue between Cardinal Pole and Thomas Lupset* を書いている。その中でスターキー＝ポウルは国家を政治体 (body politic) と呼び、社会有機体説を持ち出して、各構成員がそれぞれの職分を充分果して国家の福祉に貢献すべきものであり、その時、政治体は健康であると論じ、その経済的条件として、農民と手工業者が勤勉であること、囲い込み禁止の法律が厳格に施行されること、商人が有益な貿易に従事すること、地代を固定させることの4点を挙げている。また、神が人間に理性とともに感情と欲望を与えたので、人間は神慮を忘れてこれらに溺れ、自己の利益のみ追求し易いものであると述べて警告を与えている。

ロンドンの絹織物商で、かつてフランシスコ会の修道僧であった Henry Brinklow (d. 1546)<sup>(13)</sup> はその著述の中で、宗教改革によって修道院は解散し僧侶の勢力は衰退したものの、それを略奪し分配しあった世俗の領主やジェントルマンに僧侶の財産への欲望が伝染し、今度は彼等が地代や一時金の引き上げ、土地の取り上げなどによって民衆への収奪を始めたと批判し、また、彼はロンドンを世俗的富裕のゆえに世界の華に数えながら、同時に、ロンドンの貧民の数の大きさを指摘したのであった。

fierce tracts で有名なピューリタンの牧師である Robert Crowley (1518? - 1588)<sup>(14)</sup> はエドワード王の第一回議会の第二回期中 (1548. 11. 24 - 1549. 3. 14)、議会に『報告と請願』を提出し、その冒頭で、僧俗の財産所有者による貧しき庶民へのきびしい抑圧ほど緊急で重要な問題はないと述べている。また、その中で *The Merchant of Venice* にも関係のある徴利を問題のひとつとして取り上げているのである。というのは、いかなる徴利禁止法も効果があがらなかったため、議会は1545年に年一割までの利子徴収を認めたのであった。これに対して、徴利は



神の禁ずるところであるとして、クロウリーは議会に再審議を要求したのである。その後、1552年に再び一切の徴利は禁止されるが、その禁令も1571年に解除されてしまうのである。

さて、エドワード六世の治世になると社会経済問題も一段と注目を集めるようになった。国防とも関わる囲い込み問題は物価問題と結びつけられて考察され、また、その原因は多数の論者によって人間の貪欲にあるとされたのである。例として、下院議員であり囲い込み調査委員会の一員である John Hales (d. 1571)<sup>(15)</sup> を挙げることができる。彼は1548年の『高物価の原因』という論稿で、食料品一般の騰貴について家畜家禽の飼育不振、少数者による買い占め、国王の徴発の3点をあげてはいるものの、特に物価高騰の原因を牧羊囲い込みと買い占めに求めている。また、1549年の農民一揆の原因も牧畜業者、牧羊業者の貪欲にあるとした。しかし、さらに『福祉論』のなかで、政治はもはや貪欲を除去する工夫をこらす必要はなく、まず貪欲を誘発する社会的条件を検討しなければならないとも論じている。

さて、イギリスが絶対王制下の重商主義の段階を迎え始めたのはエリザベス一世の即位した頃である。丁度その時分、毛織物に新たな課税をしようとする動きがあったが、それに反対して、ヘイルズは1559年3月20日付でウィリアム・セシルに手紙を送り、現在イギリスの富裕は毛織物の製造と輸出にかかっており、それゆえに、イギリスは商人を欠くことが出来ず、もし新課税が実施されると、商人は活動をやめて輸入商品の価格を吊り上げるようになって、女王の支出の増大をもたらすと主張して商人の保護を進言したのであった。そして、1569年には Thomas Wilson<sup>(16)</sup> が「ロンドンに女王の控えの間であり…われわれは陛下の侍従である」と言えるほどに、商人・金融業者は自信を持ち得るようになったのである。さらに、貿易商人こそ王国の富の管理者であり、それを富裕ならしめるという責任を担っているからには、その責務にふさわしく

商人は素養と伎倆とを修得すべきである<sup>(17)</sup>と考える Thomas Man<sup>(17)</sup> のような商人も出てくるのである。また、1580年代に *A Discourse of Corporations* の著者は王政下の重商主義により国家財政と結びついた特権と独占を不足と高価の原因と論難したのであった。

このように、チューダー王朝前期よりエリザベス朝まで、一貫して“貪欲”が問題となったのである。しかしながら、その批難の対象も次第に変化したのである。アームストロングは商人層をイギリスの福祉よりも自己の利益のみを追求して、国家を貧しくする人達と考え、国家の正当な構成員とは見なさず “strange members” と呼んだのであった。彼等の活動が農地の囲い込みを生じ、物価の高騰を招き、庶民生活を圧迫している原因と思われたのである。しかし、エドワード六世時代には、貪欲を誘発する社会的条件を解消するのが政治であるという考え方も現われ、やがて、重商主義時代に入ると、イギリスの富は毛織物の製造と輸出に依存していると考えられるようになり、商人はイギリスに欠くことの出来ない構成員としての地位を確保することになるのである。それでも、金貸業者は悪辣なやり方のために庶民の嫌悪と軽蔑の対象になっていたのであり、実態は R. Greene & T. Lodge; *A Looking Glass for London and England* (1587-91) にその一端を見ることが出来る。当時、金貸業者はその不当な利得のために貪欲と結びつけられて考えられていたのである。こうして見ると、金貸業者を「貪欲」と結びつける社会的素地が存在したのであり、もし *The Merchant of Venice* を英国道徳劇の流れの中に位置づけられるとすれば、シャイロックが貪欲な金貸しであるのは妥当な帰結なのである。

#### IV 「貪欲」と老齡

『イル・ペコロネ』でアンサルドーはユダヤ人より一万ダガットをジャンネットーのために借り入れている。また、『マルタ島のユダヤ人』

のバラバスも金貸しの経験があると言っているところを見ると、ユダヤ人が金貸業者であるのは自然であり、従って、シャイロックがユダヤ人であるのも材源に添ったのであらうと考えられる。それでも、シャイロックについて、なぜ老人として表現されているのかという問題は残るのである。

*The Castle of Perseverance* において、「貪欲」は「現世」から、七美德によって守られている「人間」を堅忍の城より投降させるように依頼されると、「寛大」を差し置いて、「人間」に親しい旧友として話し掛け籠絡しようとするのである。それに対して、「人間」は老齢による体の衰えを訴えて、「貪欲」に自分の進むべき道について助言を請うのである。すると「貪欲」は次のように説得している。

AVARICIA: Petyr, thou hast the more nede

To have sum good in thyn age:

Markys, poundys, londys and lede,

Howsys and homys, castell and cage.

Therfor do as I the rede;

To Coveytyse cast thi parage.

Cum and I schal thyne erdyn bedede;

The worthi World schal geve the wage,

Certys not a lyth.

Com on, olde man, it is no reprefe

That Coveytyse be the lefe.

It thou deye at any myschefe

It is thi-selfe to wyth.

(ll. 2511-24)

この劇は「貪欲」は人間の根本的で、しかも最終的に落ち入りやすい大罪であることを示している。従って、「貪欲」は老人と結びつけられて

いるのである。また、この個所に引き続いて、「食欲」は老人にとって財布が親友となり、金があれば人は老人をも相手にするものだから、自由になる間は食欲であるように諭すと、「人間」はそれに共感して堅忍の城を捨てるのである。

HUMANUM GENUS: Coveytyse, thou seyst a good skyl.

So grete God me a-vaunce,

Al thi byddynge don I wyl.

I forsake the Castel of Perseveraunce:

In Coveytyse I wyl me hyle

For to gete sum sustynaunce.

A-forn mele men mete schul tyle;

It is good for al chaunce

Sum good owhere to hyde.

Certys this ye wel knowe:

It is good, whou-so the wynde blowe,

A man to have sum-what of hys owe,

What happe so evere be-tyde.

(ll. 2550-62)

*Respublica* の *Avarice* の台詞にも食欲と老人の関わりに言及した個所がある。

Then, age cometh on; and what is a little gold

To keep a man by drede that is feeble and old?

No man, therefore, blame me though I would have more:

(p. 184 ll. 13-6)

また、シェイクスピアの同代人 C. Marlowe の *The Jew of Malta* (1592) にも食欲と老人の関係を暗示するような部分がある。マルタ島総督ファーニーズがバラバスの食欲さをなじってこう言っている。

る。

*Ferneze* Out, wretched Barabas!

Sham'st thou not thus to justify thy self,

As if we knew not thy profession?

If thou rely upon thy righteousness,

Be patient, and thy riches will increase.

Excess of wealth is cause of covetousness,

And covetousness, O, 'tis a monstrous sin.

(I. ii. 119-25)

その後、バラバスは財産は生涯の汗の結晶であり、老年の楽しみだと言っているのである。

You have my wealth, the labor of my life,

The comfort of mine age, my children's hope,

And therefore ne'er distinguish of the wrong.

(I. ii. 150-2)

このように、貪欲と老人の関係に言及した個所を英国道徳劇の中に見出すことが出来、その関係はシェイクスピアの時代にも生きているのである。従って、ひとつの解釈をほとこせば、金貸しシャイロックは英国道徳劇の伝統を受け継いでいるために、老人として表現されていると結論づけることが可能になるのである。

イギリス社会に商人層が台頭し、絶対王制の下で重商主義社会へ移行していく過程で問題にされた“貪欲”が一連の英国道徳劇のテーマともなり、ひとつの伝統を形成していったのである。そして、*The Merchant of Venice* もその伝統の流れを汲むものと考えられ、そのような視点から「貪欲」との関わりでこの劇を考察してみると、『イル・ペコロネ』を素材として採用し、当時の社会事情を反映しながらも、英国道徳

劇の伝統が生きている劇であると結論づけることが出来るのである。

<注>

- (1) J. R. Brown, ed., *The Merchant of Venice* (The Arden Shakespeare, rep. 1979), Appendix I, pp. 140-53.
- (2) A. M. Best, "The Dispute of Justice and Mercy with Special Reference to *The Merchant of Venice*," University of Washington abstracts of Theses, IV (1939), pp. 109-110.
- (3) Peter Happé, ed., *The Castle of Perseverance*, Four Morality Plays (Penguin Books, 1979), pp. 75-210.
- (4) A. C. Cawley, ed., *Everyman*, Everyman and medieval Miracle Plays (Everyman's Library, 1970), pp. 207-234.
- (5) J. M. Manly, ed., *Specimens of the Pre-Shaksperean Drama*, I (New York: Dover Publications, 1967), pp. 353-85.
- (6) J. S. Farmer, ed., *The Dramatic Writings of John Bale 1495-1563*, Early English Dramatists (New York: Barnes & Noble, Inc., 1966), pp. 1-82.
- (7) J. M. Manly, *op. cit.*, pp. 525-618.
- (8) J. S. Famer, ed., "Lost" Tudor Plays 1460-1566, Early English Dramatists (New York: Barnes & Noble, Inc., 1966), pp. 135-272.
- (9) W. C. Hazlitt, ed., *The Conflict of Conscience*, A Select Collection of Old English Plays, 3 (New York: Benjamin Blom, Inc.), pp. 30-142.
- (10) 加藤一夫, 『テューダー前期の社会経済思想』(未来社, 1966), pp. 8-298.
- (11) *Ibid.*, pp. 9-65.
- (12) *Ibid.*, pp. 67-105.
- (13) *Ibid.*, pp. 107-136.
- (14) *Ibid.*, pp. 137-188.
- (15) *Ibid.*, pp. 245-260.
- (16) *Ibid.*, p. 265.
- (17) *Ibid.*, p. 266.